誘惑に遭わせないでください

ルカによる福音書　１１：１－１３

司祭　ヨハネ 井田　泉

聖霊降臨後第 7 主日
2025 年 7 月 27 日

京都聖三一教会にて

この前の主日は、福井に行っておりました。北陸伝道区霊交会（合同礼拝）が福井聖三一教会で開かれ、説教と午後の講演の依頼を受けて、話をしてきました。40 名あまりの合同礼拝は非常によかったと感じました。何が良かったか、一つだけ挙げるとすれば、みんなで一緒に唱える箇所――大栄光の歌、ニケヤ信経、主の祈りなど――が、急がずバラバラにならず、一句一句みんなで丁寧に声と心を合わせて祈ることができた、ということです。

礼拝が生きていればわたしたちは力を与えられる。学ぶことと祈ることで教会は成長する。どうかあらゆる教会がそうであってほしいと願います。

同じ日に参議院選挙が行われました。その結果についてわたしは非常に憂慮しています。「日本人ファースト」を唱えて外国人を排斥するような党が、天皇主権を唱えてわたしたちはそれに服従すべきだと主張する党が大幅に議席を増やした。これは危険なことです。80 年前までの日本はこのような力に覆われていました。この程度の説教をするだけでも警察に引っぱられた。実際に京都復活教会におられた河崎 直（すなお） 司祭は、国家（国体）に反するようなことを語ったというので捕らえられ、数ヵ月の獄中生活をされたのです。

そのような政治を二度と繰り返させてはなりません。わたしたちは歴史と聖書からもっと学びたい。特に、イエスに流れ込

んでいた預言者の精神に触れたいと願います。

さて今日の福音書は、イエスが弟子たちに祈りを、祈ることを教えられた箇所です。イエスに「祈りを教えてください」と願い出たのは弟子たちの一人ですが、イエスは祈りを弟子たちみんなに教えられました。2 節を見ると、「そこで、イエスは言われた」とあるのですが、一つの単語が訳されていません。イエスは「彼らに言われた」と原文には書かれています。つまり皆がイエスの語られることを聞いた。一人の勇気ある発言、一人の率直な質問が、皆の益となったのです。

「そこで、イエスは（彼らに）こう言われた。『祈るときには、こう言いなさい。父よ、御名が崇められますように。……』」

ルカによる福音書 11:2-4

お気づきだと思いますが、これは主の祈りです。このようにして主イエスご自身の祈りは、わたしたちの祈りとして与えられることになりました。

今日は、ここでイエスが教えられた祈り全体ではなく、その最後の一つの祈りを大切に心に留めたいと思います。

「わたしたちを誘惑に遭わせないでください。」ルカ 11:4

弟子たちが、わたしたちが誘惑に遭うことの危険を、その恐ろしさをイエスは知っておられました。それは、ご自身が誘惑

に遭って死ぬほど苦しまれたからです。イエスの生涯は、誘惑、試練の連続でした。日本語の聖書では誘惑、あるいは試練と訳し分けられていますが、元の言葉は πειρασμός（ペイラスモス）で、同じ言葉です。悪しき者、誘惑する者、サタンの働きが顕著であると考えられる場合は「誘惑」と訳され、それ以外は「試練」と訳されているようです。

イエスの生涯において、誘惑はどのような時にはっきりと現れたでしょうか。まず、公の活動を開始される直前です。イエスは 40 日 40 夜断食して、悪魔の誘惑に遭われました。またその生涯の終わる直前、あの死を前にしたゲツセマネでの祈りにおいて、イエスは誘惑の力と戦っておられました。あのときイエスは 3 人の弟子たちにこう言われました。

「わたしは死ぬばかりに悲しい。ここを離れず、目を覚ましていなさい。」マルコによる福音書 14:34

「誘惑に陥らぬよう、目を覚まして祈っていなさい。」14:38

イエスはこのとき、誘惑にさらされて死ぬほど苦しまれて、3 人の弟子たちに一緒に祈っていてほしいと切に願われたのではないでしょうか。

イエスの生涯の中で一つ、試練、誘惑に遭われた例を思い出します。ヨハネ福音書 6 章にこう書かれています。

「イエスは、人々が来て、自分を王にするために連れて行こ

うとしているのを知り、ひとりでまた山に退かれた。」6:15

人々はイエスを担ぎ上げて王様にしようとした。人々の願望や期待にこたえて王になれば、力を得ることができる。人々を動かし、国を動かすことができる。君臨し、支配し、無数の人々の称賛を浴びる。何の地位も持たない放浪の教師であるより王になるほうが、イエスの目的はよほど実現しやすいのではないか。しかしイエスは、これが誘惑であることをはっきり知っておられた。だからそれを拒否して身を隠された。**「山に退かれた」**というのは、ひとり祈るためではなかったでしょうか。

また同じヨハネ福音書6章では、多くの弟子たちがイエスの言葉につまずいて離れ去ってしまいます（6:66）。そのとき、少数の弟子たちが、決意してイエスのもとにとどまったのです。

誘惑の本質とは、神の道から逸れることです。それが悪魔のねらいです。誘惑は、神が託された使命を放棄し、優劣、上下、支配・服従というこの世の価値観に埋没することです。またあるときは、神への信頼を失い、希望を失うことです。悪魔はこれをねらっています。昔、C.S.ルイスという人の書いた『悪魔の手紙』という本を読んだことがあります。悪魔の親分が悪魔の子分にいろいろと指示を与える内容です。いかに人を堕落させるか、いかに人を失望させるかして、人を神から引き離そうとする。どれほど悪魔が巧妙で、悪賢いかがわかります。

実はわたし自身も誘惑に苦しみぬいた経験があるのですが、そのことは別の機会にします。

「わたしたちを誘惑に遭わせないでください。」ルカ 11:4

今日の福音書に戻ります。イエスはこの祈りを教えた後、諦めないで執拗に頼むこと、神さまに執拗に祈り求めることを促されました。わたしたちが困難にあって、失望して、神への信頼が弱まってしまう。祈ることをやめはしないまでも、諦めのほうが勝ってしまう。そういうわたしたちの困難や弱さをイエスは知っておられて、わたしたちを愛するがゆえに心配されて、一つの大切な約束をされた。今日の福音書の終わりを読んでみましょう。

「このように、あなたがたは悪い者でありながらも、自分の子どもには良い物を与えることを知っている。まして天の父は求める者に聖霊を与えてくださる。」ルカ 11:13

唐突に「聖霊」の約束をイエスはなさったように感じます。しかしイエスは知っておられたのです。人を、わたしたちを、教会を、誘惑から守るのは聖霊であると。人を、わたしたちを、教会を、生かし命を与えるのは、知識だけではなく、経験だけでもなく、神の霊、聖霊であると。

イエスがヨルダン川で洗礼を受けられたとき、天が裂けて聖霊が鳩のように降ってイエスに留まりました。イエスとその活

動を内側から生かし支えていたのは聖霊でした。教会を誕生させたのは聖霊でした。

イエスは今日、わたしたちを襲う誘惑が何であるかを知るようにと、促しておられます。同時に、わたしたちとともに、「誘惑に遭わせないでください」「誘惑におちいらせず、悪からお救いください」と祈っていてくださいます。

祈ります。

主イエスさま、あなたはわたしたちを襲う誘惑を、わたしたち以上に知っておられます。どうかわたしたちを、富の誘惑、地位や名誉の誘惑、力の誘惑、自己保身の誘惑から守ってください。また困難に打ちひしがれて、あなたへの信頼を失ってしまう危険からわたしたちを守ってください。聖霊を求めることの大切さを教えてください。わたしたちの弱さと重荷を担ってくださったあなたのみ名をほめたたえます。アーメン